

「人間の尊厳」の実現に人生をかけた川崎君への讃歌

柳澤 明朗（労働旬報社社長）

野村先生の初めての授業の日、研究室に呼ばれて紹介されたのが彼との出会い。以後、五〇
年余、仕事も人生も二人三脚で歩む友の誕生だった。それは生涯変わらずにあったのだが、思
わずひきこまれてしまう人なつっこい少年のような笑顔で握手してきたことが忘れられない。

だが、その彼がまれにみる読書家・研究家で、哲学・社会科学の基本文献をドイツ語で読み
こなし身につけていたなど、ドイツ語を、授業の時も普段の会話でもよく使う沼田先生と生き

生き話していることはあったが、そこまでの学識を身につけていたことには全く気づかなかった。

彼が亡くなったときに、やはり川崎君と中大の同期で生涯の友、水野勝東洋大教授の話で「中央大学の学術部哲学会で哲学、社会科学の基本文献をドイツ語で購読する指導をしていた横井先生に一年の時からハードに鍛えられて、原典学習をして身につけていたんですよ」と聞かされ納得した。

沼田著作集を担当していた石井編集長（当時）が、著作集の月報をまとめるとともに、それに沼田先生の一文、沼田夫人、川崎君、石井君、私の感想を新たにつけて製作した『聴松団欒』に、次のように書いていることを思い出した。

「……先生自ら三〇年余にわたって書きつづけられた全著作、単行本五〇数冊、論文二五〇余で、大学ノート八〇頁余の著者目録……」の話だ。



『回想の川崎忠文』 への追悼文

そのちょっと前に、沼田家にいったときだと思うが、すでに会社を退職していた川崎君も編集作業にアルバイトで参加要請をしてあったので、著作集の話になったとき、沼田先生の作品のほとんどを川崎君がもっているといいだし、先生がびっくり、すっかり感激して喜んだ顔を思い出した。

私たちの学んだ当時の早大大学院は野村早大教授、沼田都立大教授、松岡明大教授の労働法学会の三巨頭が教授陣、島田助教授以下に佐藤、中山、初井、竹下先生などの高弟が綺羅星のごとく並ぶのだが、この先生方が私と川崎君の生涯の仕事となる労働旬報社の中心的執筆陣となっていただくことになるわけ。

なかでも沼田先生家との絆が彼の人生づくりそのものに与えた影響を鮮明に思い起こす。敢えて「家」というのは、沼田先生のみならず奥様も一緒での深い深いおつき合い、交流が院生の時からあるからだ。

沼田家の夏休み中恒例行事になっている別荘生活のときの留守番とか、先生の一年余にわたるドイツ留学の間の留守番などをはじめ、住み込みで先生の膨大な研究資料、蔵書の整理など、日常的な生活での出入り自由、泊まり込みでの交流が奥様をして、「沼田の教え子というよりは、弟としか思えませぬ。家族の一員です」といつてくださるような絆で結ばれていたことを思い出す。

なぜ、これほどまでに沼田のトノに（殿様。私がつけた沼田先生の渾名で、私たちの先生への思いが表現されているといい、けっこう使っていたのだが。奥様はいやだわ〜とって笑っておられたが……）忠誠を誓い、心から尊敬していたのかと思ったときに、川崎君の人的良さ、才能を発見し、そんな交わりをされたのが沼田先生だったことに思い当たる。

なにより、あたかも「若き、哲学青年、同士」のようなお互いの尊敬と話し相手への共感、

哲学論争をしたり、学説に抵抗したりして楽しんでた。先生の哲学を理解していたことが伝わっていたのではないか。その際のドイツ語の駆使、また、それぞれの違いがあるが家族などの原体験での共通した想いも絆の土台のひとつにあるのかもしれない。彼はトノの励まし、評価に自信をもって生きるバネをもってきたような気がする。

こうして育てられた彼は、「人間の尊厳」づくり・実現に人生のすべてをつぎこんで生き抜いたのだと思う。沼田先生ご夫妻を「人間の尊厳論」のリーダーとすれば、その実現に奔走する実践者のように思えてならない。

解雇や不当な差別が行われる場面をいち早くつかんで、その現場になにをさしおいてもとんでいって、人間回復の取り組みをいっしょにしてきたのだった。彼の人間哲学の師とおおぐ先生に出会えると、すぐにその先生の家に住み込んだり、近くに住居を移し起居をともしながら学ぶ常習でもあった。「実践論・矛盾論」の訳者の松村一人先生と大学院の仲間で研究会をはじめ、沼田先生との対談を企画したり、ついには自宅に住み込んでいくとか、川崎君らしい思い出を残してくれている。「広島県原爆被爆教師の会」の石田明会長などとの交流など、川崎君の人間性が見つないでいった本当に多くの師や友人に恵まれていたことを思い起こす。

最後に、会社が経営困難になったとき、「労旬の灯を消すな」と株主や多くの執筆陣の先生、読者、業者の皆さんの協力体制をつくる最先端にたつて、社の継続・発展への道をきりひらい

「人間の尊厳」の実現に人生をかけた川崎君への讃歌（柳澤明朗）

ていつたときの川崎君の取り組みに、心からのお礼を述べておきたい。

〔「回想の川崎忠文」刊行委員会、2011年12月14日発行〕

◇現代労働組合研究会のHPへ（TOP）

5 <http://e-kyodo.sakura.ne.jp/roudou/111210roudou-index.htm>